

林先生 先生がおなりのなされたのは日清日露戦争(1904年)10月頃から度おれから満25年になりました。私は最近

新聞などで、林の中でいふ人などは思ひがけがたいが、今日は先生への25年奉の身についていふこと申し上げておきたい

と思ひ村、考えておられるの向東北大学から創立50年祭をあげるからという名に招待状がまいりました。

と聞いておられる先生と東北大学の創立の際、先生と一緒に東北大学にまいりましたから、先生は満25

年仙台にお住みになられたらお祝いです。その25年間にいふ人、いふ人などありました

がしかし先生がおなりのなされたから25年くらバは比較にもなりました。その25年間に

に数学や教育やその他の変化には驚くべきものでした。私は先生に関係ありますとや先生の

興味がありおなりのことを先生のお身にいかたいと思ひます。先生が松三高等学校で視察の際におな
りになられた。先生と一緒にいられた吉江先生から当時大阪にいた私のところへ電報がまいりました。

翌朝 ~~その~~ 一番の電車で松江にまいり ~~来た~~、先生のお妹さんや若江先生にお目 ^{NO2} にかかり、いまわなき先生に

お目にかかったのはその日の夕方でした。どういふふうか先生のお体(いづ)を仙台に ~~お送りした~~ おはこび

するかは誰にもわかりませんでした。お宅の仙台的大学から人が来るのを待つことにしました。お宅から令息

がお二人、東北大学から藤原先生等が松江に着かれたのが翌朝の未明でした。そこで「靈きゆう車」で

運ぶことにしたので、松江の駅には「靈きゆう車」が来たので下関から車を呼ぶことにし、高等学校

でお ~~送~~ ^送 をあけてから「靈きゆう車」にお運がしたのは明利がつかつたころです。その頃には新聞やら電報などによって知った

先生の門人などが松江に十数名もつめかけておられ、「靈きゆう車」がかなり大きな駅に止まることに、17人のオヤ

数学の先生方が駅に礼儀にそなわられたさんあり、お葬式が一週間後と決まりましたので、私は京

都までお見送りをし、一たん大阪に帰りましたが、後で聞いたところによりますと、その「靈きゆう車」は急行や準急

にはついたらないので、普通列車で仙台まで運ばれたわけです。大変多くの時間がかかり、とくに東京駅から

ノ野までの間は汽車でなしに電きゆう車を選ばなむ非前=11313な=とが^{N03}おきたりです。そして東海道から

東北線仙台に至るまで少し大森駅には必ず参拝の人達が参りまはるので、大森を"旅行"であわけてです。

さて、お葬式の日には、私は大阪から仙台にまはりまは。先生のお宅にうかがって奥様をおはじめ="

家様のオタにさよう辞を申しあげ、東北大学の諸先生と一緒に"通知"を行ひました。ある日のお葬式は先生

が当日おに"教授"をやめられて召替教授になつておられたため、大学葬ではおりませんでした。お兵の

らお兵に"葬儀"のお寺に行く途中大学の玄関に入り総長はじめ大学の先生の礼拝が御座。

葬儀は非常に盛大なもので、あまりに盛大なもので外へ"凱旋"將軍を迎へてお正月に思われ、深い悲しみの心

をあらわすにはどうかと思つた程の盛大さでした。が、さういふ=とのはでさ~~を~~おきた先生には

その方がおかつたのかもしれません。さういふをすませばから私は旅館に一人静かに先生の又今日の葬式

のこといひつ考へ=ました。そしてその夜、東北大学の遺^{政学教室の}葬^の会に出席して藤原先生達といひつ思い出さるに

ふけたのでした。

先生は晩年はおれだけ熱心に和算の研究に没頭されましたので、^{NO4}これから先生没後の和算界についてどうなったか

について申しあげましよう。まずオード東北大学では先生の遺^木遺^木を集めて、藤原先生が中心となり平山君が^正おぼろげに校^正に

あたりとこれに山形の柳原君~~も~~も手伝って林鶴一博士「和算研究集録」という上下二冊の大著を^正成^正館の厚

意で出版するこになり、それが完成したのは昭和12年12月でした。二のような立^正派^正の大冊が完成したのは

先生没後わずか二三年の後でした。私がこの本に接したのは、大阪をやめて東京に出てきてからで、その頃

日華書院がすでに始まっておりました。和算の研究は先生の都合、東北大学では藤原先生と平山君によつて

継続されましたが、藤原先生は太平洋戦争が終つてからまもなく亡くなりました。藤原先生の研究は日本学院

から出版とれ余五巻の最後の巻は今年の夏でたばかりです。平山君も戦後、大学の講師として和算を専攻

され^考関^考和^考伝^考などの大著が出されました。他に東北大学の卒業生で、加藤平~~在~~^正二^正門^正君がおります。

加藤君は台北の高等学校教授時代から和算の研究を始め、戦後には名古屋の私立大学で研究

1960.6.30

を続けられています。そこで和算で理学博士の学位をとった人のことを申しあげます。No. 5 先生の生前

には和算で学位をとる人というときはお考えの通りで、戦後には藤原先生が没後

窪田先生が停年でお亡くなりからのごとき。そのころは泉信一君が東北の数学をやっていたが、お

と私のころには、一人で加藤平吉君が和算の学位論文を出すのだから、その審査をして

くれないかと仰り頼まれた。その頃東北大学には何も関係もない私に学位論文の審査を大学から

依頼されたのは口立大学も民主主義的にあるべきだ"と感じました。しかし聞いてみると平山君が審査

にあつたといふことなので私はおどろきました。その責任の重大なことを感じ、泉教授に申し

した。泉さん、大学ではお約束に違ひは"学位を下すか、それとも非常=教壇を審査と

するか"と尋ねた。おと泉君は「いやどうも出来ては"学位を下すもの人だ"という話の

で「それなら私をも審査員に加わりたい。ただそれには90からもう一つお返しをいってほしい。三上義

夫さんのお方が北東北大学に論文を出せば東北大学では審査員にしてくれませんか、どう

いうものでしょう?」すると泉さんは三上さんへ論文をだしてその審査してほしい、との話をして、そ

ROKUTO

また加藤君の論文が私の手元まいりましたから、私は詳しく審査の上、学位を授けらるに価するの半判定を
私の英文かけを ~~書いてあげ~~ 書いてあげ、正しく

した。ただし ~~審査報告~~ 審査報告は私がかかなくて泉さんのオに願います。それから後、平山君も加藤君の後に学位をもら
つたので、私は三上さんに東北大学に学位論文をおくることをすすめました。私の周囲の人で三上さんとじつにな

大矢算一君、平田實君等が尽力した。その頃の三上さんは郷里の庄島島の田舎においで、悲小惨な生
活を送つていたので、このようにして三上さんの論文が提出されたので、東北大学の依頼にお

き審査報告をかいて学長に報告した。その時の審査員は岡田良知君、泉信一君、私の三人でした。

このようにして昭和24の秋暮に三上さんは学位を得、翌25年の暮に郷里で亡くなったのです。木

先生！先生は生前、三上さんといふとど一生の編輯敵でした。先生がおいてゐたときは「三上さんが東北大

学から学位をもらうなんてことは絶対に考えられない」とでした。 ~~先生も私が~~ ^{今では} 先生も私が東北大学から三上さん

に学位をとらせたことに村に ~~先生も~~ 笑つて「承知下さる」と考へております。それから直接和算の

関係ありませんが、中口の数学研究家が現れました。それは武田 ~~すま~~ ^{木南長住} 君といふ人で、京都大学を卒業して

満州に居て戦後に日本の内地に帰つて、工科大学の先生をしている人です。武田君は直接私の指導を受けた

けれども、中口の現代の数学及び西洋数学の中口への輸入問題などについて驚くべき程綿密な研究
をなさつたのです。

先生は聰明な方でした。先生の数学者と仲良しな方でしたが、私に水でもなかに
 にはおさうになられた方もありました。私が今でもお礼儀におもいますのは、
 最初先生がお助けになられた。林本清君と結婚問題からにわたるにお
 嫌になられたこと、物は先生から誰よりも先に林本君の婚約を
 お断りなされた方と思われました。にまた、意外でした。先生がお七をとり
 藤原先生の厚意で林本君はもうなく、学位をとられました。二、三林本
 君のことについて私を考えてみますと、先生はあれだけ進歩的な方であられ
 ながら、心の奥底には古い旧道徳がある。林本君はその奥で、日本の文
 と水たのかと考へられます。

今日になってみますと、先生が残された最大の業績は東北数学会雑誌

の創刊にあつたかように云われておりますが、あの雑誌も今日では国際的
 有数の雑誌として発行されております。先年創刊号から何十冊か

冊数が少なかつたので、世界各口の需要の爲に丸書きから再版したこ
 があります。これは非常にありがたいことで、先生がご存心にお働きな
 られたこと、林先生も考へてみますと、先生があの雑誌をこ

計画なされたのはまだ仙台においてで、地にならないう前でした。その頃、地
 行されたおた東京物理学会の記事をおきくにまわして日本が最良

邦文の口際的な数学会専門雑誌を作ること、私もお考へて、水
 されまじい。しかし、その考へたが、水を充分熱心ないつちに東北

においてにすることが決まらぬので、仙台に行かされることになり先にお雜誌
 のことをもち出されたのでしたねえ。始め藤原先生はちゆうちよされたよう
 ですが、先生の断固たる決意の下に大学の講義が始まるころにはもう
 あの雜誌の二号が出たのでしたねえ。そして一度あの雜誌が出るやいなや
 日本の教育界は新しい~~色~~^色に進み始める大きな動機となったのでした。
 今日では戦後存続から日本の大学の教が何百となり、教育学の論
 文をのせる雜誌の教もずいぶん多くなりましたが、東北教育学雜誌は
 ままます世界的な成果をほしくつあるのです。私などはおへそ
 もの「史」というものは自分達で作るべきものであるということをなにも
 よくその雜誌の創刊によることだわいです。

先生は三十年間、私に本意に三厚巻をして下さりました。先生からおし
 かりを受けたことは、ただ一度あったと思いますが、その事については申しあげま
 しょう。私が¹教育学教育の根本問題を²書いた夏先生が大阪に立
 ち寄られた時、先生は敬い態度で私にどうしてあんな本を書いた
 のかと責められました。私は頭を下げて何も返事もしませんでした。
 その時分、どうして先生におしかりを受けたかどうしておかしなことをした
 かなにしろあの本は一般教育界に歓迎されたこと反対に東北教育
 や物理学校には非常に不評判の本だたよります。



物理学校の長尾君も一晩を酔っぱらってさかたにはとうしました。よく考
 えて来ますししかるれば数学の教える方の二まぶこもい事や
 又いゆる形式陶治中の問題に対する意見相違をい
 はしに、これこそ数学者や数学教師達が考えていました数学
 教育そのもの考え方の相違がはげしいので私の親しい方々の間
 に大きなショックを与えたものと考えます。それはその後に出
 したた紅数学教育史紅に對しても多くの人達の間で、いろいろの評
 判をたえられたものでした。天佐藤良一即ちやた島
 大理科授業の私に對する態度からまやく誤解がとけました
 ようです。林先生御自身紅が数学教育史紅が出た時は大受喜
 えて、大瀬直徳の先生が幕末時代の数学書等に於て私の
 足らないところをたえ教えて下さりました。ただこの数学教育史
 のなかには種かいろいろの人を強く紅批判紅しました。林先生
 はよく冗談にこの本の続編が出る時は自分もいなりぬらぬか
 ない、算算つしやたものでもなく先生ノ、数学教育史で
 物は水も後は何的批判をやったことはなく私の批判の
 対象になったものはもふらた知者紅は官僚学校紅といったもの
 でした。このような意味で先生がおなごなりに長らくを評し書か

あげた「自然科学者の任務」という論文を先生ののこらんに残る
 ことが出来ないのは、はなはだいさです。しかしての頃は、私田数学史
 に対する態度が多そう人達の向は、誤解され、東北大学を卒業
 した高橋君~~君~~が私の方の大阪の塩見研究所にいられた時
 高橋君の指導者であった藤原先生が、高橋君、塩見研究
 所にいらるも、いかに数学の階級制~~性~~など研究するでないよ、という
 注意を身えられたという時代でした。その時に私はそのよう
 数学史の論文をまとめて了度、先生がおなごりになると、
 印刷をかりました。数学史研究を先生のお目につけらるる
 のがなごりの遺憾です。

先生ノ、数学の研究状態が戦後に非常に変わったといふことは前に申し
 ました。しかしまして変わらんとすあつたことは、光武大戦の後に、昭和の始めに
 学士院の報告が出された頃~~頃~~もいえます。それは東京大学の高木先生
 の主張な業績が大きな刺激を身えたものも考へられます。その頃先生は
 学士院の雑誌の査読になさおられたはずですが、ご意見の相違から
 まもなくおやめになったといふことです。長い自然をみますと、お水はかえつて残
 念地であつたと思ひます。それよりも、もつと前、先生が東北大学を退官され
 東北数学雑誌を創刊されたこと、これ考へてみれば、日本の数学の大き
 く発展した最初の刺激であつたといふる、もしれません。

教育の方でも先生が日本数学教育界をひきよめたれたことが数学教育の論文部省の身によらない教師自身の身による進歩の大きな動機をつけたものに相違ありません。先生の言は事に対して

嫉妬心といましようか、反感を抱いた先輩の数学者のおられたことは事実であります。たゞ藤原先生などは先生が邪魔になら

ず方がなかつたと思います。私がパリにいらした時、大正十年でしたか

藤原先生がヨーロッパを巡回されパリにいられて、先生とパリで飲

んだことがあります。その時藤原先生は、小倉君、林さんが数学教

育界をよそよそのは自分たちにもならないし、又はたでいろいろ迷惑に思っ

ている人達がいる。小倉君、君が帰る時、林先生にすすめて、数学教育界

の会長をなさようにしてくれまいかと申されました。私はその藤原先生のお話

を聞いて非常に驚いたのですが、その時はなんとも申しませんでした。しかもある教

育教育界は先生自分たちこそであつたし、今日でもおもしろきは文部省の御用

係のよきに私は思ひます。林先生、戦後の今日ではさう今の他に数教

協がござり、これこそ野党的な数学教育の研究団体が出来たかえお

ます。しかもその中心人物は東北大学が先だ遠山由南さんであります。

それにおなじことには、今官の若、数学教師の中には、私がおもった数学

教育研究の研究などから、私が数学教育研究の先覚者であ



(覚)

るかのように考えて、る人達がおります。先生が御業になられたら、
に三つけいにお感じになられるかもしれません。私など先生と遊ばせて
数学の教師という職業に打込んでやたらとうもがななかなです。私などは、

ほんの数学教育の門外漢です。ただ素人にもなるのです。三つ、うまでは、私

は先生に学んだところがあるが、あまなまなような気がしますが、私が先生にもうとも

多く学ばせていただきました。人間とその独断心でした。独断心(ルビ)の考案でした。私が先

生の長間の交際の間に政治に介入したことはありませんが、ただ

一度、先生の政治に対する感想をほそりとうかがったことはあります。それ

は大正の始めでした。桂大即か内閣を力作した時のことですが、西園寺内閣も

やめとして桂が内閣を作った時で、口口が憲政擁護を叫び、桂内閣打倒

の運動が起きた時です。先生は明らかにほそりと桂内閣打倒の態度で桂

の軍事的官制的態度を憎んでおられました。そして西園寺に同情してお

られました。それからもう一つ昭和七年先生が名誉教授になられた時、カ

ラのことは、中坂君や岡田君が唯物論研究を交起した時、んん

カで平大でやあげられた模様です。私は知りませんが、それで先生は平

紙は唯物論研究会が出来た、君もやそ、うううだが、興味をもてて

との年紙をいただいたことがあります。他に私の記憶によりますと、先生の

高野師範における同僚としては岡田氏も、張秋風氏(ルビ)の思想に興味

をもつたらしいです。仙台では私も、中坂先生と緒に三つ、大に飲

んだことがありました。

林先生、仙白におりました時は、大学の教員の関係の人達の他は物理
の石原純之や哲学の由辺謙之の他にあまり親しい人もありませんで
元

したが大坂にまいりましたからは、大坂の模様が変わりました。大坂では教員の

竹中明君や先生も、中心の東北出の高橋進二君、京都大学出の伊

藤誠君、城電三君、などが勉強しておられました。私の教えた学生は

皆、医者または人達で、大阪大学の生理学の久保常雄君その他

の人がたくさんあります。ところが私が科学史をやりますと、他の人達と

知事のようになりました。それは東大出の物理の菅井修三君や近藤

洋之君等の他に京都の大学院で統計をやっていた川巻三君

今の京都府知事等がさきました。そのうちにだんだん統計の方面では

高野山三郎先生や森田達雄君等と知りあひになりましたが、

さらに私の数学史の研究があらわれると、哲学者の三木清、

田辺元、^{三木}長田博者君、坂田潤君、さらに^{三木}法学者の^平野村太

郎之、経済学者の^{三木}経世君、哲学者者梯明生君等がこ

ろれました。それから私が大阪文理科大学で講義をする前後か

ら長田新之助等と親となり又東京の佐藤甚一郎、鍋島

大郎先生と親となりました。なかでも大阪を上げよう

信

私の最も親しい友達は今借相郷宗政の別荘として大阪で幅をきか

(威一)

している相原君(威一)君等時埤員研究所図書館員と有力な共産党

口

員に居る山崎健太郎君でした。ところが頃から大阪学出の若

郎

学学生達のある人々、たとえば栗田君等が私の所に出入りす。

ように存りました。さて東京に引上げましたから、物理学校校

係の人には云うまでもなく、科学史の方の関係から物理化学の武

男

谷三羅君、化学の田中実君、数学の三田博君、史文学

雄

恒

の小林山崎雄君、古史の平田寛君等を知りました。一方

法政大学で統計を講義をしていた関係から木村暢太郎君

棟

や私なかつた七女のちほ勝田守一之等と知りあになりました。

宗像誠也

こうして、こうちに中央公論社社長の島中雄作先生が作られた

口民学術協会の会員にされました。そこで功を以てよく

桑木殿翼

左右

津田君、柳田健諸先生や藤田才助白鳥一

男

正宗

長谷川先生も知りあになりました。

如是親閑